

農業と科学

昭和48年10月1日(毎月1日発行) 第204号
昭和31年10月5日 第3種郵便物認可

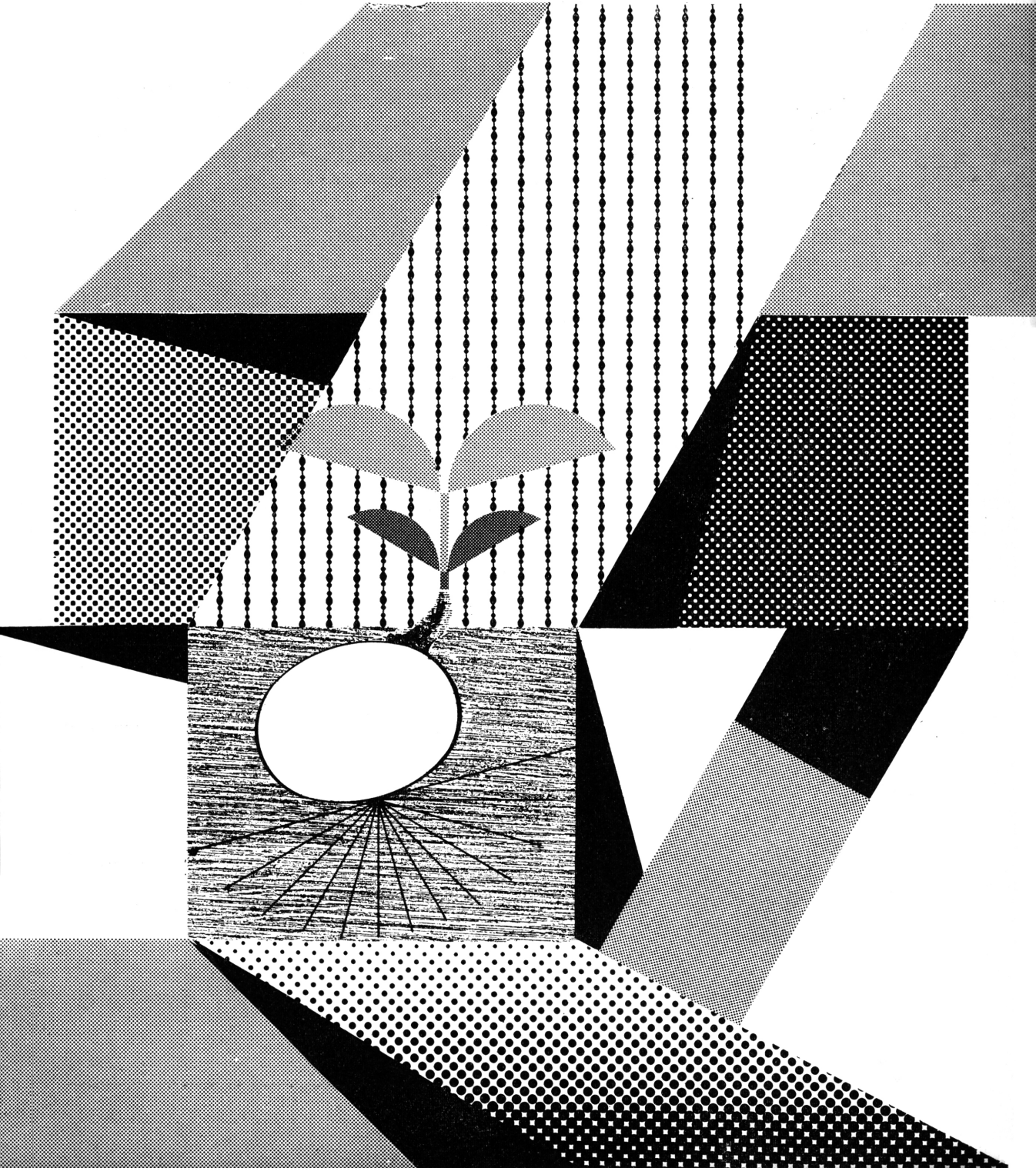
発行所 東京都中央区築地1-12-22 コンワビル
チッソ旭肥料株式会社

編集兼発行人：伊藤和夫
定価：1部10円

農業と科学

1973
10

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.



いちごの施肥法 (その1)

特に被覆栽培について

農林省野菜試験場久留米支場

本多 藤雄

1. はじめに

最近のいちご栽培は収穫期の前進と、長期多収栽培の方向に進みつつある。品種はダナー、宝交早生、はるのかの3主要品種が中心であるが、ダナー、宝交早生は元来露地栽培用品種で、トンネル早熟、そして株冷蔵、あるいは山上げ低温、電照、さらにジベレリン処理など休眠打破により、人為的にいちごを制御して、収穫の前進をはかる栽培体系が開発された。

一方はるのかは、促成栽培用品種とダナーとの交配から育成され、促成から露地栽培の収穫期を通して、ビニールをかけるだけで何ら処理せずに、長期間連続して収穫できるように育成されたものである。このように品種や作型が複雑であり、また収量も作型で異なるので、施肥量や施肥法が異なるのは当然であろう。

2. 根の伸びと株の生育のバランス

いちごは地上部に果実をつけるものであるが、花芽の分化から開花、開花から成熟と、すべて温度によって果実は生産されるから、ハウスで保温あるいは暖房機で加温すれば収穫は早くなる。

しかし、果実の収量は株の発育によって大きく影響をうけるが、株の発育はさらに根の伸びに大きく左右される。

根の伸びは地上部から見ることはできないので、作型にしても施肥にしても、案外無頓着に考えられている。

第1表 根の伸びと温度

| 定植日 月日 | 定植日の温度 ℃ | 新根の平均伸長 cm | 最大伸長量 cm |
|-----------|-------------|---------------|-------------|
| 9. 25 | 22. 0 | 4.6 | 7.2 |
| 10. 5 | 19. 2 | 7.0 | 10.2 |
| 10. 15 | 16. 2 | 4.8 | 7.2 |
| 10. 25 | 14. 4 | 2.0 | 3.2 |
| 11. 5 | 12. 2 | 0.7 | 1.8 |
| 11. 15 | 9. 0 | 0.2 | 0.5 |

定植苗を水洗し、水で湿らせた紙で根を包み、室内におき、翌朝断根していない太根について、その伸長を調査した。

第1表はいちごの根の伸びと温度との関係を示したものであるが、根の伸びは20℃前後が最もよく、15℃以下では根の伸長は悪く、10℃以下ではほとんど根は伸びない。

このことは、定植期の適期が否かを意味するものであって、少なくともこの温度のときに、ほ場で根を伸ばすことが大切で、その前に定植を終わる必要がある。

従って定植期は暖地で9月下旬、温度が低いところではさらに早い定植が必要で、10月中旬以降に定植する場合は、収量をあげることは不可能であり、少なくとも長期どりで4~6トン/10a以上を目標とすることは困難で、短期でせいぜい3トン以下しか収穫できないであろう。

理想としては適期に定植して、出蕾(らい)が認められてからビニール被覆するのが、根の伸長、株の生育、そして果実の肥大成熟のバランスがとれた姿となろう。

3. 促成長期どり栽培の施肥の考え方

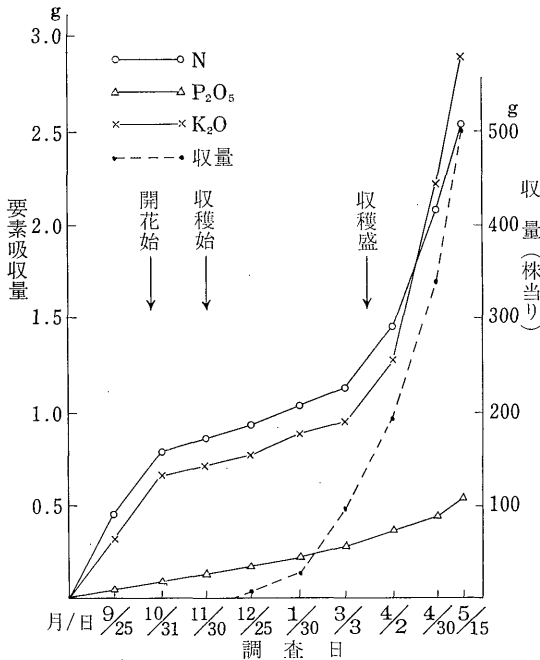
促成長期どり栽培とは、11月から5月まで収穫する栽培である。その際の肥料の吸収状況を図示すると第1図の通りである。

窒素と加里の吸収は開花期から吸収が増加し、収穫盛期からさらに増大する傾向がみられ、収穫後期まで増加し続けるのに対し、りん酸は収穫までわずかずつではあるが吸収し続ける。

目次

- § いちごの施肥法(その1).....(2)
特に被覆栽培について
農林省野菜試験場久留米支場 本多 藤雄
- § 富山米の今昔.....(4)
富山県経済連食糧部長 早水 勝之
- § 加工用きゅうりの栽培(契約)と施肥.....(6)
東海漬物製造(株)園芸技術研究農場長 富岡 芳雄
- § 淡路たまねぎの生育と貯蔵性について.....(8)
兵庫県三原農業改良普及所 木村志津馬
- § 境町レタスの団地化について.....(10)
茨城県境町農業協同組合 北島 作治
- § 私はこう思う.....(12)
「園芸相談」の利用と協力について
名古屋営業所 近本 明雄
- § 営業所めぐり:その3
農産物増産への協力を強調する.....(14)
堀田(大阪営業所)さんの情熱
- § 干ばつ被害 894 億円.....(9)
- あとがき.....(10)

第1図 はるのか促成長期どり栽培の収量と肥料の吸収経過 (圖試久留米1970)



窒素や加里の吸収の多くなる開花始は、定植して1カ月後であるため、肥料の吸収が比較的早くから行なわれるので、早くから肥効があらわれるように肥料の種類あるいは元肥の施用を考える。

硫酸、CDUを用いて行なった試験結果から考えると、第2図のようにCDU化成、硫酸は6~12kg/10a、CDU単体は18kg/10aですぐれたが、かん水した場合は硫酸、CDU単体とも8kg/10aでよかった。

いちごは肥料に対する抵抗性が弱く、電気伝導度(1:5)で0.7ミリモーで根の伸びが抑えられ、一時的に生育が抑えられ、障害なく順調に伸びるのは0.3~0.5ミリモーであるので、伝導度のあがりやすい肥料はさけ、また元肥に多肥することは好ましくない。

長期栽培であり、肥料の吸収状況から考えると、元肥には緩効性肥料や有機質肥料を中心として、10a当り8~12kg程度とし、追肥は常に新葉の緑色と果実の肥大状況をみながら、液肥として追肥する方がよい。果実の肥大が悪

いのは、肥料が多すぎて葉緑が濃い場合に多く、その時はかん水した方がよい。

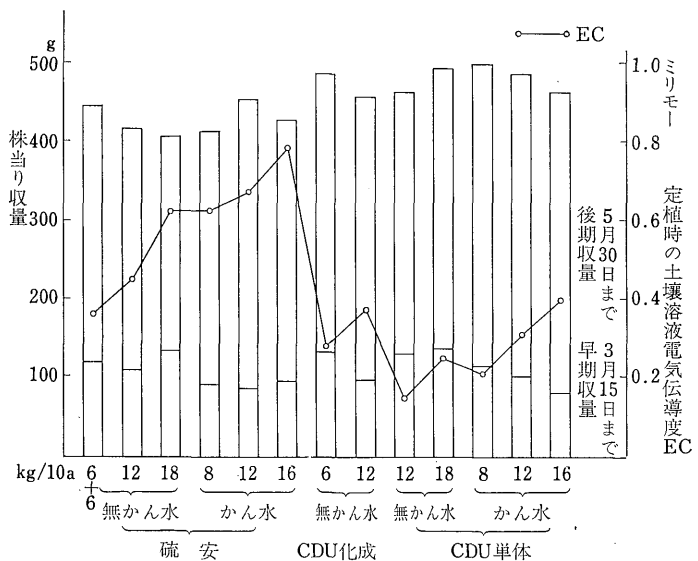
液肥は窒素と加里を主体とするが、りん酸が入っても差支えない。施肥量は目標収量10a当り4~6トンとして窒素20~25kg、りん酸15~18kg、加里20~25kgが標準である。

4. 半促成栽培における施肥の考え方

半促成栽培は、一般に水田裏作に栽培されるため、定植期が遅れ、そのためほ場で根が伸長するのは年内は少なく、ビニール被覆後に、株の発育と同時に根の伸長も行なわれ、地温の影響を受けやすく、第3図のように生育初期の肥料の吸収は少なく、開花して果実の肥大期から吸収の増加がみられ、収穫始から窒素、りん酸、加里とも急激に増大し収穫の終りまで続く。(第3図は次号に)

すなわち、年内の吸収はわずかであり、春先以降吸収が多いので、追肥を中心の考え方になるが、定植してビニール被覆までに数カ月あり、その間は露地条件と同じであるので、降雨による肥料の損失を考慮しなければならないので、雨による肥料の損失の少ない緩効性肥料や有機質肥料を中心に元肥に施し、マルチやビニール被覆直前に追肥として施すか、あるいはビニール被覆後、液肥を中心とした追肥を数回に分けて施す。(この項続く。)

第2図 促成長期どりいちごの施肥と、かん水の効果 (圖試久留米 1968-69)



“富山米”の今昔

富山県経済連食糧部長

早水 勝之

富山県の農業環境

富山県は、本州の中央部、北陸道の中心に位置し、東西90km、南79kmのコウモリが羽をひろげたような形をしており、面積は4,252平方kmで、わが国の総面積に占める割合は1.28%、順位も34位である。地形的には、東は峻嶮な立山連峰と境川によって新潟・長野両県と、南は重畳たる山岳をへだてて岐阜県と、西は俱利伽羅丘陵をもって石川県とそれぞれ接しており、北は能登半島に抱かれた富山湾(日本海)に面している。この3面による山岳と、北面の富山湾とのあいだに、典型的な扇状地平野である越中平野がひらけている。

これを、飛騨高原からのびている呉羽丘陵が二分し、東側の神通川・常願寺川流域および黒部川扇状地を含めた地域を富山平野、西側の庄川・小矢部川流域を砺波平野とよんでいる。

気候は、いわゆる日本海型気候の夏季は高温多湿、冬季は積雪寒冷型である。すなわち夏季は太平洋高気圧におおわれて気温が高いので、稲作に好適であるが、冬季は西高東低の気象条件がもたらす北西の偏西風が、北日本アルプスにさえぎられて雪を降らせるために、富山県の農業は、水稻単作地帯としての宿命を負わされている。

ちなみに、富山県の農家戸数は約7万8,000戸で、耕地面積は約8万5,500haであるが、冬季の積雪が春・夏季にとけて、豊富な水となって流れ、灌漑を便利にしているため、水田面積は7万9,500haで、全耕地面積の93%も占め、全国でも最高の水田率を誇っている。

軟質米としての富山米の特徴

少なくとも、昭和14年に米穀配給統制法が施行され、米が統制時代を迎えるまでの富山米は、おもに東京方面をはじめ、北海道や樺太(いまのサハリン)方面に移出され、とくに北海道と樺太からは、米と交換に魚肥やコンブ、塩干物などの海産物が大量に移入されていた。本来、富山米は別名

「軟質米」ともよばれ、西南暖地の硬質米とませで炊くと、きわめて味のよいご飯ができあがることから「味つけ米」ともよばれていた。

その点、早生種の「農林1号」と「水島」、中生種「銀坊主」は、昭和の初期において「味つけ米」の代表的銘柄米として、一世を風靡したばかりでなく、当時、東京あたりでは「すし用米」として重宝がられたことが、年輩者のあいだで今でも語りぐさになっている。その農林系統およびその他の品種は、いまでは富山県において昔日の面影を偲ぶ術(すべ)さえない。

しかし、聞くところによると、千葉県の稲作農家の中には、東京都内のすし屋さんで農林1号の契約栽培を行ない、収量がともなわない関係もあって、1俵1万5,000円から2万円で購入されているという。

余談はさておき、米が統制時代を迎えてから今年で35年目になるが、なんといっても戦後4半世紀にわたる稲作のいちじるしい変化には、目を見はらせるものがある。以下その推移を大雑把にみてみよう。

戦後、稲作栽培体系の変化と

富山米の苦難時代

食糧の絶対量が不足していた戦後10年、すなわち20年代は、《質より量》が優先した時代だけに、収量をあげるためにいろいろな品種が栽培されていた。

とくに本県の場合は売業者によって、県外からあまたの品種が持込まれ、一時は数百種類にのぼる品種が栽培されていて、それが富山米の商品価値をいちじるしく悪いものにしていった。

本県でも、そうしたこともあって、昭和30年11月に産米改良協会を設立し、食糧供給基地「米どころ」としての全国的地位を、確固不動のものにするため、以来、産米改良に不断の努力を払ってきた。しかし、早まき・早植えの新しい稲作栽培体系が、農外収入を得るための出稼ぎ手段に転化したこともあったけれども、とにかく一般化したことにより、収穫作業が10日以上も早回るようになり、残暑きびしい8月下旬から9月はじめにかけて早生稲が刈取られるようになったために、30年代は本県にとって、胴割米で悩まされた時代であった。その間、水分含量15%を目標に、適正乾

燥の励行運動を展開し、これが普及徹底につとめてきたが、一時過乾燥による胴割れとは逆に、水分過多米の発生が問題になったことがあった。

また、本県では品種面からの産米改良対策が積極的に推しすすめられ、36年2月に県奨励品種をホウネンワセ、越路早生、黒部1号、ヨモヒカリ、マンリョウ、山陰17号、新大正もちの7品種にしぼり、それまでの県認定品種を廃止した。その後、県水稻奨励品種はいくたの変遷を経て、48年度においては、ホウネンワセ、越路早生、コシヒカリ、日本晴（以上うるち米）、こがねもち、新大正糯（以上もち米）、五百万石、北陸12号（以上酒米）といった具合に、全く品質本位の8品種が、奨励品種になっている。

栽培技術についてみても、戦後はもっぱら増収ということで、まず保温折衷苗代による早まき・早植えが登場し、これがトワダや藤坂5号など画期的な増収型品種の普及とあいまって、収量的に安定傾向を示しはじめた。しかし、病害虫防除にキメ手のないことが、安定増収の阻害要因となっていた。

この点については、20年代後半から水銀剤や有機塩素剤、ひ素剤、有機燐剤、浸透性の殺虫剤などすぐれた農薬がお目見得し、元肥重点の施肥から穂肥重点の施肥へと、大きく変わった画期的な施肥技術や水管理など、稲作技術の高位平準化とあいまって、増収効果がいちじるしく高まり、それまでの豊作を上回る高水準の収量が、平年作の収量として定着するに至った。

しかしながら、40年以降は、徐々に供給過剰傾向が表面化し、43年産米の大豊作が「量より質」へと、稲作に180度の方向転換をせまる決定打となった。

ちなみに、本県の43年産米の10a当り収量は503kgで、県稲作史上の最高記録であった。

そうした矢先、本県では41年度からそれまでの「うまい米作り」にかわって、「2割増収・5割省力」米作り運動の展開をみたことは、皮肉なめぐり合わせであったといえよう。

自主流通米も次第に定着

その後、過剰米による食管特別会計の赤字累増を解消するため、45年度から5カ年計画で生産調整が行なわれたが、それより先、食管制度の再検討が行なわれ、44年度から自主流通米制度が実施された。

本県の場合、自主流通米については、関西方面は政府管理米との関係から、当然大量に引取られるものと予想されていたが、結果的には政府米のつながりのうすかった京浜を中心とした地域に大量出荷され、好評を博した。

ちなみに、本県の自主流通米の販売状況を見ると、44年産米で2万5,201tであったものが、45年産米4万1,200t、46年産米5万9,340t、47年産米6万9,735tと、着実な伸びを示しており、完全に定着した格好である。

しかしながら、本県の自主流通米をここまで伸ばすためには、胴割れ米や乳白米などの防止はもちろん、異臭米やカドミウム汚染米などの難問題を乗り越え、富山米の汚名を返すべく、挙国的な努力が払われたことを忘れるわけにはいかない。

農薬公害をなくすために、特効薬の名をほしいままにしていた数々の農薬は、国民の健康を守るため、今では全面的に低毒性のものに切替えられたが、これは当然の帰結であるけれども、われわれ系統農協としては、品質本位の米作りに徹し、国民食糧の安定確保に、将来とも万全を期さなければならぬと確信している。

しかも、このことは地球自体が小氷河時代——つまり冷害年次を迎え、ここ数年来世界的な農作物の不作がつづき、食糧不足の時代に当面しているだけに、ますます重要度を増してくるものと思われる。

軟質米地帯の本県としては、幸いにも銘柄米で全国最高の折紙がつけられているので、「味つけ米」としての本領を具備した良質米を、1粒でも多く消費者の皆さんにお届けし、よろこんでもらえるように、これまで以上に懸命の努力を払うものである。

加工用きゅうりの 契約栽培と肥料

東海漬物製造(株)園芸技術研究農場長

富岡 芳雄

はじめに

“加工原料の契約栽培はもうからない”というのが一般通念のようである。業者ペースでことが運ばれ、青果栽培にくらべ収益が少ないからであろう。

しかし年により、季節によって花をさかせたり、トラクターでしき込んだりすることがあるのを考えれば、契約栽培は一概に見すてたものでもなかろう。ことに流通事情のよくない地域では、結構立地する場合があります、現にそのようなところがいくらかもある。

さて、きゅうりの加工といえば醤油漬、味噌漬、粕漬、酢漬など漬物加工が主流をなしている。

そしてその栽培との結びつきとして、一次加工、つまり塩蔵の問題がある。塩蔵施設とその処理能力によって栽培地や栽培面積を決定する必要があり、どこでも栽培できる筋合のものではない。

また、青果栽培地帯で余ったものを塩蔵するという考えがあるが、これは好ましくない。なぜなら、加工品も品質競争の時代であり、屑物は不適合であるのと、青果用品種が必ずしも加工用品種と一致しないからである。

栽培の概要

トマト栽培ではすでに無支柱栽培が普及したが、きゅうりでも用途によっては地這栽培で差支えない。支柱栽培は資材や労力がかかるが、管理や収穫には都合よく増収になる。ことにピックル系のもは支柱栽培にした方がよい。

1. 品 種 漬物原料用品種の特性は増収品種であることその他、① 形状が加工目的に適している。② 塩蔵歩留りがよい。③ 歯切れや肉質がよい、などの点があげられる。

落合系は皮が硬く、3尺系は歩留りが低いなどの欠点がある。四葉系や白イボ系は肉質がよく歯切れもよい。それぞれの用途によって品種を選ぶ

べきである。

ピックル用品種は一般に耐病性が弱い欠点があり、今後の品種改良が待たれる。現在品種ではサカタP-B、みかど試交GY-35M、久留米P-1号などが収量多く形状も整い有望である。

2. 播 種 一般に露地栽培が主体であり、播種時期はその地域の霜害の心配のなくなった頃である。畦立、マルチをしてから所定の位置に2～3粒ずつ播く。増収をねらうならば作期を前進させるために、ポット育苗して定植する。

露地定植はペーパーポット育苗の15日苗を、トンネル定植はポリポット育苗の20日苗を、露地定植より20日くらいさかのぼって定植する。

3. 栽植本数 地這栽培は2mの畦巾に、40～50cm株間で、10aに800～1,000株、支柱栽培では150cm畦に40cmの株間で、10aに1,600株ぐらいが

写真-1 四葉系きゅうり

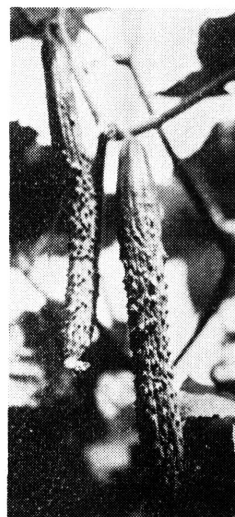


写真-2 生育中のきゅうり



適当である。1株本数は、1本立よりも2本立の方が収量が多くなるので、間引する必要はない。

4. 支柱の組み方 きゅうりを充分生育させ、収量をあげるためには、しっかりした支柱組みが必要である。

表一 支柱の所要資材 (10a当り)

| 品 目 | 規 格 | 数 量 |
|---------|-------------------|---------|
| 竹 | 直径3cm, 長さ3m, 2m間隔 | 360本 |
| (パイプ支柱) | 長さ3m, 中央接続, 3m間隔 | 110セット) |
| ナイロンネット | 巾180cm, 長さ18m | 44枚 |
| 針 金 | 14番線 | 10kg |
| | 16番線 | 33kg |
| ポリテープ | | 5巻 |
| | 杭 長さ50cm | 30本 |

材料は手近かに入手できるものを用いるが、パイプ支柱は耐用年数が長く、作業がらくである。所要資材は表一のようなのである。畦の両端に杭を打ち、支柱の中央部を14線で張り杭に固定する。ネットは上下を16番線に通し、ポリテープで支柱に取りつける。ネットは粗密のムラがないように、均一に伸ばして張る。

5. 管 理 摘芯については品

種の節成性を考慮に入れる。一般に節成性の高いものは摘芯の必要はなく、節成性20%以下のものは摘芯により若干増収する。主枝と側枝の節成性は、後者がやや高い場合が多く、節成性の高い側枝を出させ、多くならせようとするわけである。そして10a当りの蔓数を4,500~5,000本とした場合が最も収量上がる。これ以上枝が混む場合は、枝の間引きをする必要がある。

かん水は土の乾燥状態に応じて行なう。畑かん施設のあるところでは畦間かん水をするが、マルチの下にチューブを入れてかん水すると、株元の湿り工合がよく、よい方法である。

病害虫の防除は農薬の使用基準にしたがい、病害は発生前に、害虫は発生初期に先手防除を行なうようにする。

収穫は加工目的に叶うよう、規格に合わせて収穫する。収穫の初期および末期を除いては、毎日収穫し、過熟果が出ないように注意する。長果系は

地這で7t, 支柱で10t以上を目標にしたい。ピックル用の短果系は1個30~40gの大ききで収穫し、10a当り12~15万個の収穫がある。

肥 料

きゅうり栽培では、栄養生長と生殖生長のバランスをとることが肝要である。初期は、窒素過多で茂りすぎないようにし、中後期には、肥料不足で芯止り状にならないように注意する。このためには3成分のバランスをとり、元肥は堆肥とともに深層施肥を行ない、緩効性肥料を重点的に使用し、追肥を行なって肥切れしないようにするなどの配慮をする。

肥料の用量は収量目標を考慮して決める。目安として、窒素1kg当りきゅうり300kgとふんでよからう。当場で用量試験をした成績は表二のようなのである。つまり25kg区の10tに対し、35kg区は13tで約3割の増収を示したが、45kg区では必ずし

表二 窒素用量と収量 (kg/10a)

| 月、旬 N用量(P.K) | 6 | | | 7 | | | 8上 | 計 |
|-----------------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|--------|
| | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | | |
| 25kg (18. 20) | 270 | 1,070 | 2,620 | 1,378 | 1,715 | 2,198 | 723 | 10,013 |
| 35kg (25. 30) | 178 | 1,133 | 3,653 | 2,609 | 1,894 | 2,678 | 882 | 13,024 |
| 45kg (35. 40) | 175 | 1,245 | 2,073 | 2,508 | 2,753 | 2,222 | 670 | 12,645 |

注：トンネル、支柱栽培(47年)

も増収とはなっていない。

この成績などを勘案して、支柱栽培における肥料は、表三のような設計で推進している。地這栽培は支柱栽培にくらべ、収量が劣るのが常であるので、この施肥基準から2割程度減量したものが適当であろう。

表三 支柱栽培の施肥基準 (kg/10a)

| 肥 料 名 | 全 量 | 元 肥 | 追 肥 | | | | |
|--------------|-------|-------|-----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 堆 肥 | 2,000 | 2,000 | | | | | |
| C D U化成(482) | 160 | 100 | 30 | 30 | | | |
| B M ようりん | 40 | 40 | | | | | |
| N K - 8 0 8 | 100 | | | | | | |
| 苦 土 石 灰 | 120 | 120 | | | 40 | 30 | 30 |

最近開発されたC D Uタマゴ化成は、C D U窒素の溶出や崩壊を防いで、さらに長効きをねらったものであるが、これを導入することにより、きゅうり栽培によりよい結果が期待されよう。

淡路たまねぎの収量と 貯蔵性について

兵庫県三原農業改良普及所

木村 志津馬

淡路たまねぎは、収量および貯蔵性において、全国有数の産地として知られている。

しかし、近年、Botallii を中心とする貯蔵腐敗が増加し、昭和46年産たまねぎにあっては、冷蔵中に20～60%も腐敗するものが現われ、農家はいうに及ばず、冷蔵業者においても相当な打撃を蒙った。

この原因については、次のような点が指適される。

肥料の吸収に関係するもの

① 生育中の天候と肥料の吸収

定植当時から気温は、ほゞ平年よりやや高めではあるが、降水量は12月～4月にかけて平年386mmに対し、46年は299mmと極めて少ない。従って、肥料の分解吸収が平年に比較して遅ききの状況となった。

② 追肥時期

以上のような肥料の吸収からして、生育はかなり遅延している。そのため農家は、追肥量の増施を行なったものが多く、また施肥時期も生育があまりにも小さいので、遅くまで続けられた。

③ 堆厩肥の施用

当郡においては、18,000頭の乳牛が飼育されており、耕作面積4,000haに、これ等の堆厩肥が施用されている。

当地は殆んど二毛作ないし三毛作田地であるが、10a当り2～2.5tは施用されていることになる。

この厩肥も前記の肥料と同様に分解が遅れ、遅ききの原因となっている。更にこの厩肥は易分解性の有機質肥料であるが、毎年同様に施用しているため、土質もかなり肥沃土壌が多くなっている。

病原菌 Botallii の発生状態

冷蔵中の腐敗結果から46年に関しては Botallii

によるものが最も頻度が高く、病害の発生を考察すれば、生育期の3月～4月が寡雨であったため球の肥大が遅れたが、5月～6月にかけて多雨のため球が急激に肥大し、例年より大球となった。

そのうえ、収穫も例年よりやや早く、未熟球の状態で行なわれ、球の頸部は太く、球部のしまりの悪い、貯蔵には不適当なたまねぎができてしまった。

一方、生育後半には立毛中に、すでにBotallii 菌による球の被害が見受けられ、例年のない病原菌密度の高い年となった。

また、吊球貯蔵中には例年より早い梅雨に逢い、頸部・球部ともに乾燥が不十分となり、冷蔵前に病原菌侵入の進展を促がす結果になり、そのうえこのような保菌率の高い球が冷蔵に持ち込まれたために、驚異的多発となったものと考えられる。

しかし、現在では、これ等に対する研究は進められているが、完全とは言えず、更に防除薬剤も残留毒の危険性から効果も十分とは言えない。従って、これ等の病害はたとえ保菌していても、発病しないような環境と球づくりがなされなければならない。

たまねぎ産地としての土壌

土壌は和泉砂岩に由来する壤土および砂壤であり、極めてたまねぎ栽培には恵まれた土質である。このことは水田裏作として70年の歴史を支えてきた主要因であるが、栽培法の容易性、技術的に優れなくても、10a当り5～7tは通常であるといった多収穫性などもその要因として考えられる。しかし、一度前述のような条件に遭遇すると、反って貯蔵性のない大球になってしまう恐れもある。

施肥について

たまねぎの施肥に付ては多くの試験研究があるが、貯蔵性と収量は相反する関係にあることが多い。つまり、粘質土壌での栽培は小球で終わることが多いが、これは貯蔵性には富んでいる。一方、砂壤土の肥沃地で、しかも、追肥を遅くまで行なうと、収量は多くなるが貯蔵性は極めて悪くなる。

従って、貯蔵用栽培と即売用栽培の施肥は、自から異にする必要があろう。また、収量を上げる

ためには、どの肥料成分が不足しても不可能なことは周知の通りであるが、なかでも、窒素不足は最も大きく影響を与えるものである。

(1) 窒 素

窒素が不足すると、小球の腰高球が多くなる。また、定植から2月頃にかけて、大苗でしかも窒素不足になると、抽台し易い。逆に窒素過剰になると、茎葉が異常に繁茂して頸しまりの悪いものが多くなり、病害に侵され易い球となる。中でも、アンモニア態窒素を多く施すと貯蔵病害による腐敗が多くなる。従って、硝酸態肥料の施用が望ましく、また収穫時には、やや肥料不足ぎみになるようにすることが大切である。

(2) 磷 酸

磷酸は苗床および定植後の冬期の根の伸長に、重大な役割りを果たしており、不足すると茎葉の発育が悪く、収量に影響を与え、過剰吸収させると、貯蔵病害に侵される率を高くする。

(3) 加 里

加里は球の肥大充実に、それほど重要視されない。しかし、植物体内での移動が容易で、しかも吸収されやすく、老葉から新葉への移動も容易である。

また、これが欠乏すると、茎葉に発生する病害に侵され易くなる。反対に充分吸収させると、貯蔵病害に対する抵抗力のある硬い球が生産できる。しかし、これも追肥時期が遅れると肥効が出にくいので、3月末までには施肥をすませる必要がある。

(4) 石 灰

石灰は、土壌のpHの調整には欠かすことができない。しかし、石灰は他の成分と異なり、体内での移動は極めて悪く、不足すると根や生長点の機能を害するため炭水化物の不足をとめない、球のしまりが悪くなり品質を低下させてしまう。更に貯蔵性のない球にもなる。従って、全期間を通じてスムーズに吸収できるように全層元肥が必要である。

(5) その他の成分

硫黄はたまねぎ独特の臭いである硫化アリルやビタミンBの生成に必要である。不足すると葉が黄化し、生育が悪くなることは既知である。

その他、銅、マンガン、硼素等においても収量や腐敗に大きく影響するので、欠かすことはできない。

(6) 有機質肥料としての厩肥について

堆厩肥は土壌水分の調整と、肥料の緩衝態的役割りを果たすことはよく知られている。しかし、当地のように、濃厚飼料で飼育している乳牛の厩肥は、それ以上に肥料としての効果も大で、収量にも影響を及ぼしている。

従って、この厩肥の多用はN過剰と同様の結果をまねくので、施用に当っては特に注意する必要がある。できるだけ元肥として施すようにし、2t以上の施肥に当っては、化学肥料はよほど控えないとN過剰となり、貯蔵性の悪い球ができるのである。

干ばつ被害894億円

数量は274万3,000トン

農林省が9月26日公表した、6月からの干ばつによる農作物の最終結果によると、被害総額は894億円にのぼり、去る42年のそれを上回るものとなりました。

ことしの干ばつの特徴は、沖縄をのぞく全国都道府県が被害を受けたことですが、42年の中国、四国を中心とした干ばつに比べると、30%以上の収穫減となる大きな被害を受けた面積が少ないことで、広く浅い様相を呈した訳です。

地域別にみると東北(299億円)、関東(260億円)、中国・四国(126億円)また県別では山形、北海道、福島、長野、茨城、岩手、栃木、群馬、宮城、千葉の順になっています。

なお、作物別に被害面積と被害トン数(被害額略)を示すと次のとおりです。

| 作物別 | 被害面積(ha) | 被害量(T) |
|-------|----------|-----------|
| 水陸稲 | 218,800 | 160,700 |
| うち水稲 | 183,900 | 122,400 |
| 麦類 | 2,630 | 808 |
| かんしょ | 21,300 | 42,700 |
| ばれいしょ | 22,100 | 84,700 |
| 雑穀・豆類 | 100,500 | 27,100 |
| 野菜 | 122,900 | 512,400 |
| 果樹 | 102,200 | 195,000 |
| 工芸作物 | 22,400 | 26,300 |
| 飼料作物 | 197,500 | 1,691,000 |
| 桑 | 32,100 | 1,320 |
| 茶 | 1,350 | 888 |
| その他 | 847 | |
| 総計 | 844,600 | 2,743,000 |

『境町レタス』の 生産団地について

茨城県境町農業協同組合

北 島 作 治

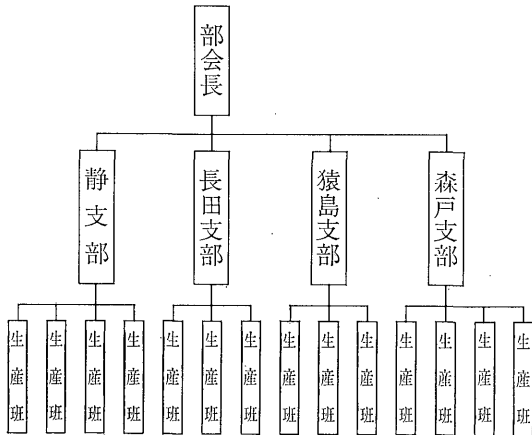
境町にレタスが入って来たのは、昭和25年と古い。当時は僅かの人々が試作するていどであったが、アメリカのベトナムへの派兵が本格化した昭和38年頃から、米軍特需が活撥になり、これに支えられて年々作付が増大して、今日のように大きな産地に成長して来たものである。昭和46年度には農林省の指定産地となり、各種の施設が導入されて、さらに増加したとも云える。

現在の作付面積は、春レタスにおいて60ha、秋冬レタスで80haの大きな面積となっており、農協の生産部会を通じて、市場に出荷販売されている。

レタスに限らず、およそ営農生産団地として具備すべきものは、まず耕地であることは云うを待たないが、これにも増して大事なことは、生産者の組織と流通の面である。

境町農協は、昭和46年に5つの農協が合併して、組合員約2,000名、田畑合せて2,163.9haの耕地を持つ農協として発足して以来、野菜の生産団地育成に全力を傾け、最初に生産部会を農協一本の姿で発足させて、生産者組織の整備強化を図った。次に各生産班毎に、集出荷場と出荷機具等を設置して集出荷の統一を図り、生産者の意思を

境町農協野菜部会組織図



尊重しながら体制作りに苦心をしたわけである。

第2年目以降は、整備された生産部会を土台として、全町共撰共販の実を示して、レタスに関しては100%の統制が実現した。その組織は下図の通りである。

生産班の中から支部長を選出し、さらにその中から部会長を選び、すべて部会長の指示に従って作付申告及出荷を行っている。なお生産資材と出荷資材等は、すべて生産部会が選定して、農協で準備をする。

生産部会には規約と規定があり、出荷物の検査は検査規定によって行われるが、ここでは省略する。農協は生産部会の事務局的な役割を持ち、コンピューターによって販売品の個人別精算を迅速に行い、個人の貯金口座に振込んでいる。

以上のようなことから、まず生産を上げるのは耕地だけではない。流通の面が整備されて、始めて生産は増大すると言える。ちなみに昭和44年農協が合併した当時の生産量は、秋冬合せて31ha、出荷量は473t余であったが、47年度では前述の通り秋春合せて140ha、出荷量は2,800tと増大したわけである。

なお産地が団地化して来るにつれて、京浜市場だけを出荷地域に限らず、中京方面や東北、北海道までも取引市場として分荷するようになった。

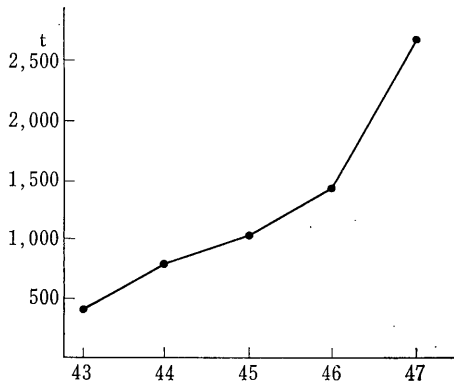
そのため、当地のレタスが全国で注目されて、販路はますます広がりつつあり、産地の大型化に伴っての販売のむずかしさは解消されたと見ている。もちろん、そのためには、全部プール計算によって、毎日の売り上げはだれも同じ価格で計算されて、販売代金として受取ることになる。

さらに、すべての野菜に共通であるが、価格の安定を図ることである。しかしこれは、国や県のような機関でやってもらわないと、どうにもならないことである。

幸いレタスは、春物については茨城県野菜価格補償協会が、また秋冬物については国の安定基金協会が設けられて、最低価格が補償されているので、これに加入するようになれば良いわけだが、春物については、県の協会では力不足で不備な状態なので、これも早く国で取上げてもらって、やや価値のある補償にして行かなくてはならない。次に43年～47年の当地のレタスの生産量をグラフ

で見ると次のようになる。

境町レタスの生産量 (43~47年)



なお当地は首都50K圏内にあり、京浜地区への出荷は約2時間と非常に早く、有利のようであるが、生産団地として統一行動をとる場合は、これがかえって、阻害要因となって、個人出荷或いは、商人による青田買い等となって、足なみをみだすのである。茨城白菜として名実ともに全国一をほこる白菜が、なかなか統一された出荷形態にならず、毎年安うりをしているのが現実である。その他野菜も生産量は非常に多いにもかかわらず、統計的な数字が出て来ない所以となっている

しかし「レタス」については、早くから農協と一体となって進めて来たことと、野菜生産部会が整備されて、活動的な組織となったため、現在のように全生産量が、一つの荷口となって集・出荷されるようになった。

これによって、市場の要望にも答えることが出来るとともに、分荷機能が完全に発揮されて、有利な販売も可能となるわけである。

今後当地方では、さらに増加の傾向にあるが、全国各産地とも大型化しつつあるので、団地または産地として発展するためには、技術の進歩による品質の向上と、各地区とも、異なる気象条件を良く研究して、産地間競争を激化させないように注意することが大事なことであろう。

それには、レタスの主要生産県はお互に情報を確認し合って、正しい認識の上に立った作付計画なり、出荷計画なりを樹立して、日本全国で出荷されるレタスが、通年平均化して、需給のバランスをとって行ったならば、生産過剰による価格の不安定もある程度防げるものと思う。

これが団地としての最終的な目的であり、団地は決して、一つの地域に限定されるものではなく、各地区ともに同一構想で進めてこそ、日本の農業は発展し、消費者も高値に泣くことなく、生産者も安値に泣くことがなくなると思われる。

それには、農民だけでなく、国も都道府県も、今までのような無計画な行政指導を根本的に改めて、日本全国を広く見通した生産計画を、確実に作り上げて行かなければならないと思う。

さらに農協も生産者と一体となって、経済活動と指導事業を機能的に運用して、組合員に信頼されるようにすべきである。

ともすれば、指導事業なり経済事業なりの事務上の分類を以って、全く別々の活動をするかのような考えを持っているものもあるが、指導事業の目的は経済事業にあり、これを考えない指導事業は存在しないものである。

そして、これ等を通じて、農協の目的である農民の社会的・経済的地位の向上をめざすことになるわけである。経済的な有利性が農民の中にはっきり分って来れば、前述のように団地としてのまとまりも、共撰共販も実現するものと思う。

そして、お互いの信頼のきずなによって結ばれた組織体は、たとえば苦しい時が来ても、崩れ去ることなく、次の飛躍を期して耐えることが出来、このことが、団地として、産地として、栄える大きな要件になることである。

最後に、近年農業を離れて外の産業につくものが非常に多くなって来たことである。これは、農業の収益は何を作っても、外の仕事によって得る収益より、はるかに少いことが上げられている。

茨城県の46年度農家所得は平均約150万円で、そのうち53%は農外所得によるものと統計事務所は発表している。これは何を意味するか。農業労働力の高令化であり、生産性の低下である。

このまま数年をすぎると、おそらく現在の生産量は大巾にダウンして、レタスに限らず、青果物全部が供給不足になることは明らかである。

米の問題も重要だが、野菜の不足はもっと重要だと言ってもいいのではないか。苦心して作り上げた今の生産団地も、年々細り始めるようになることは必至である。こうした現実を国民は正しく見て、今後の農政には充分に心を配って、今後そうした不安の起きないように、今のうちから施策をとられるようお願いして筆をおく。

私はこう思う

園芸相談車の利用と 協力について

名古屋営業所

近本 明雄

全国の各県経済連に配属されている園芸相談車は、“マル協”マークのもと、今日も各地の農協に出向いて海辺のそさい畑の土壌診断に或は山間のみかん園土壌、更に丘陵地の茶畑診断にと、明日のより良い農産物作りを目ざして活躍していることだろう。

今回は名古屋支所管内各県連の土壌診断事業に協力している私達メーカーサイドから、日ごろ感じていることなどをお伝えしたい。

全農名古屋支所管内には富山、石川、岐阜、静岡、愛知、三重の6県が含まれていて、それぞれの経済連で園芸相談車が活用されているが、その活用状況は一様ではなく、各県の農業情勢などに応じ、各県連それぞれの方針・方法で、それぞれに特徴ある運営が行われているようである。

富山、石川、両県経済連では、土壌診断事業も自主運営が原則のようで、殆んど県連独自でやっておられるので、私達が土壌診断に出向くのは東海4県(岐阜、静岡、愛知、三重)に限られる。

以下は某月某日、愛知県下のA農協における1日の行動をレポート的にまとめたものである。

“あらかじめ連絡があった通り、朝、県連支所に到着すると、いつもの土壌診断でおなじみの顔ぶれが集っていた。待つほどなく県連の担当者が運転する園芸相談車が到着し、今日のメンバーは全部揃った訳だ。(メーカー土壌診断員2人県連担当者3人) さっそく同乗してA農協へ向けスタート。本日は、ハウス地帯のトマト定植を前にしての土壌診断だそう。

A農協に着くと、営農指導員の方達が、この地域の土壌が集められている撰果場へ案内してくれる。そうして場所が設定されると、われわれはそれぞれ手なれた順序で器具を配置し、土壌を簡い、それぞれの担当分析項目をきめると、いよいよ

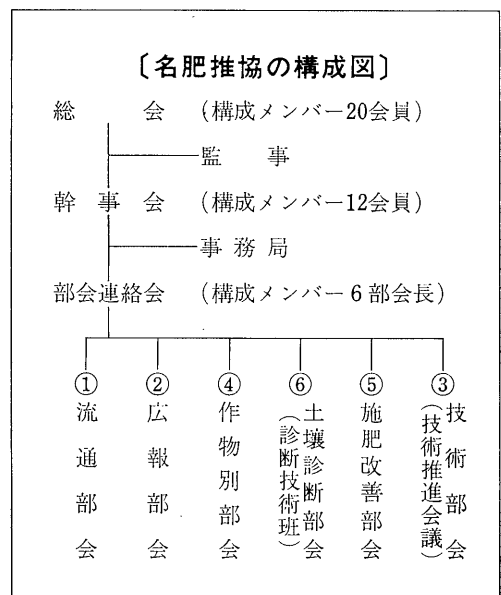
分析開始だ。

土壌のpHと塩類濃度を測定するグループ、亜硝酸と硝酸態窒素を定量する人、置換性塩基(アンモニア態窒素、カリ、苦土、石灰、アルミナ、マンガ)を定量する人、有効態りん酸、りん酸吸収係数を測定する人、…手順に従って、作業が進められる。

昼食もそこそこに、やがて比色や、比濁、或はメーターの読みから、次つぎと数値が出てくる。幸い今日は営農指導員の方々の助力があり、作業は思いのほかスムーズに進んだので、午後2時には分析はほぼ終了した。器具を洗い、乾かして、あと片づけが終る頃、そろそろ農家の方々が集ってくる。

分析項目別に数値を書き入れた土壌診断結果表のコピーもできて来たようなので、予定通り3時から説明会が開かれる。分析項目それぞれの意味、数値の読み方などについて話が進められ、唯一の診断結果である土壌改良資材の投入必要量に重点が移って行く。農家の方々が、びっくりするくらい熱心に質問されるので、やっと5時すぎに散会となった。”

さてこうした動きとは別に、名古屋支所管内には、「名肥推協」という土壌診断と密接な関係を有する組織がある。



「名肥推協」とは正式には「名古屋地区くみあい肥料推進協議会」と云い、全農連名古屋支所管内の関係系統メーカーを会員とし、全農連の事業方針、肥料推進方策にそって、くみあい肥料の普及活動を行うことを目的としている協議会である。(組織参照)

その下部組織に土壤診断部会があり、土壤診断員をかかえ、各県連の土壤診断事業に協力するという建前になっている。

元来、園芸相談車が購入される少し前、43年に分析項目や方法の打合せや、研修会が開かれ、将来は、農協指導員の班編成への補助となるという主旨で発足した、と聞いている。

現在、私達が土壤診断の手助けに出向くよう要請される場合2通りの方法があって、県連から直接メーカーに要請があり(主として)県担が行く場合と、県連から全農連に土壤診断日程の提示があり、それにもとづいて、「名肥推協」の土壤診断員に割り振られて出向く場合とである。

大体後者のウェイトが大きく、従って土壤診断班員の負担(化成6メーカー、8名)も大きくなる。

東海4県では土壤診断の歴史は比較的長く、またそれだけに定着していて、土曜、日曜を除きほとんど毎日フルに活動しており、分析点数も年間7~8,000点から20,000点にもものぼろうという熱心さであるが、それだけに、いろいろな問題もあるようだ。

農家に対する啓蒙や、土壤改良の効果等の成果などについては、県連の担当技術者の方に執筆をお願いする機会もあると思うので、こゝではおき前述のいろいろな問題について考えてみたい。

第1に「名肥推協」の土壤診断班員として名を連ねているメーカーに偏って、負担がかゝること。第2に土壤改良資材主体の説明なり、施用法に終始しているということ。従って、われわれ高度化成メーカーへの直接的な還元が少いことである。

「名肥推協」に名を連ねている当営業所員が、こゝ1年間の土壤診断出張回数を平均してみると、1月に15日ほどになり、その他に県担が数日

ずつ出ているということになる。これを直接セールス活動に結びつけたいというのが、私達の方針であり、願いでもある訳であるが、なかなか思うように行かない。

県連内部にも、土壤診断を土壤診断のみに終らせず、土壤改良資材はもちろん、化成肥料一般の拡販に、或は銘柄集約とか、或は合理化された施肥設計にもとづく面積予約の徹底に、何んとか有効利用の方法——すなわち“流通と密接に結びついた技術”ということが最近特に考えられて、いろいろな方策をとっているところもあるようですが、われわれも立場はやゝ違ふとは云え、非常に似たような問題がある。

その共通の目的を達する1つの方法として、(これはやはり設立当初の目的でもあったのだが)、農協の営農指導員の方々が、営農指導されるうえで、土壤診断が非常に役に立つ1手段であることを再認識されること、次いで自分で日常の営農指導の1つとして気軽にやって頂きたい。

そのために県連の担当技術者の方と、われわれメーカーの推進員とが、いろいろな面でお手伝いをする事、——このような態勢になったとき、現態制下で内在するいろいろな問題の幾つかは解消するような気がする。

何んと云っても1回だけの診断では、それきりである。アフターケアがあってこそ生きてくるものであり、またわれわれ化成メーカーへの利益還元もあり得よう。

前述した某月某日A農協での土壤診断についても、営農指導の方が中心となり、土壤診断結果をもとに、トマト栽培農家の方それぞれに、土壤改良資材はもちろん、元肥、追肥についても、具体的かつ適正な施用量を個別に指示し、(もちろん土壤診断に協力したメーカー資材を用いて、)その結果、肥料の統制率も大いに上がり、また、トマトの収穫も平均した良品位のものが高い収量で得られ、農家の皆様からも非常に喜ばれたというような後日談が伝わるように、土壤診断が理想的に活用されることを夢みている。

<営業所めぐり> その3

農産物増産への協力を強調する

堀田 (大阪営業所長) さんの情熱

河見泰成

徳島に降ったのに、降らぬ香川

四国山地と讃岐山脈の存在がうらめしい

もうこれ以上雨がなければお手あげだ—と心配された6月からの干ばつも、8月中・下旬に入ると、さすがに秋の気配がただよい、気圧の崩れとともに週期的に降雨を見るようになって、日本中がホッと一息ついた。

肥料に関係する者の1人として当然のことながら、筆者は、1日も早く気象状態が好転せんことを切望していたものだ。そこで「台風6号の余波—四国地方に慈雨」というような見出しを見ると本当に“有難い”と思ったが、その記事には“高松地方は雀の涙”という但書がついていた。しかもすぐ隣の徳島にさえ、雨らしい雨が降ったというのに…。

こういうとき、筆者は「四国山地」或は「讃岐(さぬき)山脈」がうらめしく、高松地方在住の方々の生活の苦しさを憶ったものだった。

結局ことしの干ばつの総決算は、全国被害見込金額約894億円、内訳は次の通りである。

(単位100万円)

| | | | |
|--------|--------|--|-------|
| 水陸稲計 | 27,300 | かんしょ | 756 |
| 水 稲 | 21,000 | ばれいしょ | 1,010 |
| 四 麦 計 | 55 | | |
| 雑穀・豆計 | 3,010 | (被害量 らっかせい 27.100 トン、あずき 6,650トン、だいず 9,290トン) | |
| 野 菜 計 | 28,400 | (被害量 さといも 78,700トン、 きゅうり 48,400トン、とまと 49,500トン なす 34,000トン、すいか 58,600トン) | |
| 果 樹 計 | 13,300 | (被害量 みかん 82,300トン、 りんご 39,400トン、ぶどう 13,100トン、 もも 21,700トン) | |
| 工芸農作物計 | 7,110 | (被害量 こんにゃく12,700 トン、たばこ 2,910トン) | |
| 飼料作物計 | 6,520 | 桑 1,540 茶 81 | |

その他農作計 355 (被害量 花 9,469千本、芝 58ha 2トン)

(これらの算出基礎：桑の被害量は繭に換算したものである。被害見込金額は、「政府買入価格」、「昭和47年(概算)農業総産出額および生産農業所得の推計に採用した価格」等を用いて試算したものである。)

では、被害見込金額でそれぞれ約59億円、約126億円と報告されている近畿地方と中国・四国地方の被害面積と被害量はどうか、次頁の表をご覧願いたい。

こういう状況下にあつて、連日現地で自動車を駆り、活躍された県担の皆さんのご苦勞はさぞ大変なことだったと思う。同時に、42年のそれに匹敵すると云われた、今夏の干ばつ試練を乗り切った大阪営業所の表情を取材したいと考えて、筆者は去る9月7日新幹線で西下した。

肥料界の中にいる者と

側面からしか見ない者とのちがひ

ちょうどこの日、チッソ旭肥料大阪営業所では販売会議が開かれていて、筆者が到着した頃は、“さて、これから午後の会議をはじめようか”というところであった。

暫らく振りに見た大阪ビルの内外はすっかり改装されて明るく、面目を一新していた。ビルの明るさが反映した訳ではあるまいが、会議室の空気は非常に開放的な感じがただよっていたのが、印象的であった。

“ようこそ、まあこゝへおかけ…”と堀田所長にうながされて、正面中央の椅子に腰を下ろして見回すと、“久しぶりじゃのう”と云いたげな顔、顔がならんでいる。いずれも現地訪問でお世話になった顔だが、見るなりパッと姓名と重なる顔があるかと思うと、しばらく考えているうちに姓名が浮かんで来る顔もあるが、中にはチョイと

| 作物名 | 近畿農政局管区 | | | 中国・四国農政局管区 | | |
|--------|---------|-------------|-------------------|------------|-------------|---------------------------------|
| | 被害面積 | | 被害量 | 被害面積 | | 被害量 |
| | 計 | うち 30%以上 | | 計 | うち 30%以上 | |
| | ha | ha | t | ha | ha | t |
| 水陸稲 | 16,200 | 2,870 | 11,600 | 35,200 | 5,860 | 23,700 |
| 四麦 | — | — | — | — | — | — |
| かんしょ | 1,140 | 226 | 3,020 | 3,640 | 680 | 12,100 |
| ばれいしょ | — | — | — | 20 | — | 26 |
| 雑穀・豆 | 2,120 | 266 | 389 | 7,070 | 1,450 | 1,790 |
| 野菜 | 7,500 | 1,080 | 27,300 | 12,000 | 2,260 | 48,300 |
| 果樹 | 14,500 | 597 | 35,100 | 30,100 | 2,350 | 64,200 |
| 工芸農作物 | 166 | 11 | 143 | 2,420 | 190 | 1,410 |
| 飼料作物 | 1,080 | 130 | 9,990 | 9,550 | 1,670 | 77,200 |
| 桑 | 158 | 6 | 6 | 2,560 | 662 | 129 |
| 茶 | 462 | 3 | 305 | 479 | 83 | 424 |
| その他農作物 | 32 | 4 | 496千本 | 613 | 8 | 56ha |
| 総数 | 43,400 | 5,200 | { 496千本 87,900 | 103,700 | 15,200 | { 5,320千本 5,320千本 229,200 |
| 被害見込額 | 約59億円 | | | 約126億円 | | |

姓名と重ならない顔もある。(失礼)

“ハテ誰だっけなあ?”と記憶を追いつけていくと、

“「営業所めぐり」の第1回目に、肥料売込みの逐鹿戦(ちくろくせん)と書かれとったが、あれはチト感心できんなあ。なぜかて、わしらはあゝいう思想で仕事はしとらんもの…。食糧や、その他の農産物の増産に何んとか寄与したい—そういう基本的な考えで仕事をやとるのですわ。全農さん、関係各府県経済連さん、そいから各地区農協さんの肥料配給業務に協力させて頂くからには、各府県の試験場、大学、そいから普及所に各種の試験やらご指導をお願いして、得られたデータにもとずいて慎重に仕事を進めとるのですわ。従って、肥料の流通面を、あゝいう風に表現することは、わたしらの気風と合わんですわ…”と堀田さんが声をかけられた。

“なるほどそうですね。私はいつも記者としての立場から、ものを見ていた訳です…”と、筆

大阪営業所会議室にて



者は完全にシャッポを脱いだ。肥料に関係があると云っても、業界の中にいる人と、常に側面からしか物をみていない者との違いであろう。

関西農業の特徴は何か

多彩・集約型と積極性

“今となってはご覧の通り和気あいあい、皆んながよう動いてくれるので何も云うことはない。合併会社の内部が融和するまでは、とかく何かとトラブルが起り勝ちのようです。が、考えてみると、一つには双方に遠慮があるためにそうなるので、お互いの遠慮を無くさなあかんと思うたのでつとめて開放的に行動しましたよ…。お蔭で、この頃はごらんの通りです。なお、細かいことについては県担なり林君におきき下さい”と、堀田さん。なかなかご苦労なことである。

関西農業の特性について所長代理の林さんは次のように語っている。

“関西の農家は、いわゆる「西南団地型」農業というのか、果樹、野菜、水稻などに積極的に進出しております。非常に研究熱心でもあり、常に他人より良い物を作ろう作ろうと考えとるようすね。ですから生産技術なども西から東へと移動して行ってるようです。いわば多移な農業経営なので、地域によっては商系と強いつながりを持っている産地があるといったように、肥料なども有機、配合、各種の化成肥料や緩効性肥料など、いろいろな肥料が使われております。”

“このように早くから開けた関係上、旧産地が多いので、動向予断を許さぬ後進県とどのように対応して行くかが、当面の重要課題でしょう。しかし、ことし干ばつ被害を受けたみかんのうち、愛媛の作柄は四国の他の3県が83ないし85という指数であるのに対して、ひとり90%を誇示しています。そして予想収穫量では静岡を抜いて「日本一」になりました。これは品種改良の結果かも知れませんが、6月以降の干ばつを予想して、その対策をたてていたそうで、その背景は昭和42年の大干ばつの体験を生かしたということでしょう。”

(編註：愛媛県のみかん予想収穫量 早生160,800, 普通404,100, 計564,800トン 静岡県 早生63,900, 普通321,100, 計379,700トン)

“なお当社の肥料ですが、CDU燐加安もお蔭様で定着しましたね。有機入り燐硝安加里との競合？その点は心配ありません。これはこれ、あれはあれ…ということです。燐硝安加里とともに園芸関係への伸びが期待されます。”

42年の大干ばつと同じペース

役に立ったそのときの体験

今夏の干ばつは、山陰の鳥取、島根の両県は別として、山口、広島、愛媛、香川など、瀬戸内海沿岸地域がひどくやられたのが特徴的である。

販売会議席上で、県担の皆さんから伺った、2、3の県の干ばつに関する状況を示すと次のようである。

香川県：被害面積は3,000町歩とみられているが、何しろ例年の1/3程度しか降雨がなかったというから想像がつかう。あと10月も雨が降らなかつたら、お手あげだったそう。

愛媛県：今治市を中心とする瀬戸内沿岸がやられているが、特にひどいのは島嶼地帯で、県では肥料、農薬など各生産資材費の軽減などの対策が考慮されているようだ。

西南地域の八幡浜方面も6、7月から降雨がなく6号台風が若干雨を落して行ったが、ことしの干ばつは、42年に中国、四国を襲ったあの干ばつとほとんど同じペースだったという。しかし、さすがに42年の大干ばつの経験はむだではなく、摘果につとめるなど、ことし愛媛県が日本一の座を占

める素地を作った。

山口県：ここも瀬戸内に面した地域、特に島嶼都がひどくやられている。柑橘産地として知られている大島では、42年より雨が少なかったそうである。が、立枯れたものはあまりないということである。

気鋭の県担の皆さん

さて、肥料に関係して15年歴のベテラン堀田浩さんを所長とする、チッソ旭肥料大阪営業所は、次長に木村節夫、所長代理に林隆夫、水野勲、四国出張所長に知念弘道の5氏が、ガッチリ腕を組んで内外の衝に当り、このほか県担として(敬称略)

玉木宣彦(山口県担当) 西森 孝(福井県、京都府、兵庫県=淡路島) 立川詔三(広島県担当)

柴田浩志(和歌山県、大阪府担当) 後藤 勇

(奈良県、兵庫県=淡路島を除く) 小畑 清(鳥取県、島根県担当) 大江 勲(滋賀県担当)

宮永長夫(岡山県駐在) 平田貞夫(愛媛県担当)

保田武夫(香川県担当) 堀尾昌志(徳島県・高知県担当)

など11人の気鋭の県担の皆さんが、連日のように現地で自動車を駆って活躍されている。

所長代理の林さんが云われたように、いわゆる西南暖地型の多彩・集約型農業が行なわれているだけに、産地によっては商系と強いつながりを持っている所があるということだ。このことは、100%面積予約実現をめざす農協の統制率にも関係がある訳。だから、誰かが云っていた。“伊達(だて)にゃ自動車に乗らんがなあ…”。ということになる。

最近、大豆の増収からアメリカの農産物輸出規制に対する態度に、大きい変化がみえてきました。要するに、これ以上輸出を規制する考えはないとのことですが、それだけで手放して喜ぶ訳には行かないと思います。

遅まきながら10月号をお送り致します。(K生)

あとがき 酷熱の残暑も、あっという間に過ぎて10月に入るとめっきり秋めいて紅葉の頃になりました。

最近、大豆の増収からアメリカの農産物輸出規制に対する態度に、大きい変化がみえてきました。要するに、これ以上輸出を規制する考えはないとのことですが、それだけで手放して喜ぶ訳には行かないと思います。

遅まきながら10月号をお送り致します。(K生)